



# 旅の約束



青い月

ひとりきりで旅をつづけているきみへ。  
はるか彼方から、吐息がふれあうほど近くから、こころからのメッセージを。  
きみの声が聞こえた。  
辛くて、苦しくて、やりきれないと嘆くきみの声。  
ぼくはいつだって、きみのそばにいる。つながっている。  
肉体でまじりあうよりも、ずっとずっと深いところで。  
ただ、いまここにいるきみは、そのことをすっかり忘れてしまっているから、こうしてなれない言葉をつ  
かい、きみにふれたいと思う。  
暗闇で凍え、ふるえているきみのところに、少しでもとどくことを祈りながら。  
いつか、きみがそうしてくれたように。  
きみはいま、なにに怯えているの。  
なにを憎んでいるの。  
きみをとりまいていてすべてのことに？  
それとも、きみ自身に？  
両方かもしれないね。  
どうか思い出してほしい。  
青く美しくかがやく星、地球と見つめあった、あの瞬間を。  
広大な宇宙を旅していたぼくらは、きらめく星々のなかでも、ひときわつよくこの星にひかれた。  
大気と水と大地をもって、うまれたがるいのちをわけへだてなくうけいれ、はぐくんでくれる、慈悲のか  
たまりであるこの星に。  
宇宙にはたくさんのいのちがあった。  
意識があった。  
ぼくらのなかのひとつだった。  
純粹なる光であった。  
すべて知っていて、なにひとつ知らなかった。  
完全であり、それゆえに不完全だった。  
たとえば、ぼくらは愛であることを知っていた。  
愛によってつくられたから、愛すべき、愛されるべき存在なのではなく、ぼくらそのものが愛であることを  
知っていた。  
けれど、愛を知らなかった。  
時間にも空間にもとらわれない、完全な状態にいるぼくらは、愛そのものでありはしても、愛というもの  
を知らなかった。  
いま悲しんでいるきみが、自分自身を知らないのとおなじように。

地球のまわりには幾重もの光の層があった。  
慈愛にひかれてやってきたぼくらのような存在がたくさんいた。  
愛とはなになのか、愛とはどうするのか、ぼくらは知りたかった。  
うまれるとは、愛を、自分自身を表現することだった。

地球はそれを叶えてくれた。

地球に降立つまえ、ぼくらは互いに封印をほどこした。

ぼくらが光であること。

愛であること。

すべては完全であること。

そのことを知るために、ぼくらはそのことを忘れた。

自分自身を見つける旅に、ぼくらは飛び立った。

笑顔で再会する約束をして。

ふみしめる大地のたしかさ、すいこむ空気に満たされた力、ふりそそぐ太陽のつつみこむようなやさしさ。

はじめての感動に胸をふるわせたのはいつだっただろう。

あれからもう、ずいぶんたったね。

ぼくらはいくつもの生を過ごした。

男と女、貴族と農民、王と奴隷、姫と騎士、親と子、兄弟、恋人、敵、同士。

ありとあらゆる立場になり、思いつくかぎりの関係をむすんだ。

きみとわかちあえるすべてを感じたかった。

それが、ぼくらの旅の目的。

きみはおぼえているかな。

ぼくらが恋人としてめぐり会ったときのことを。

ぼくは旅人だった。持ち物などなく、あるのは自分のからだだけ。

ゆくあてのない旅路。なにかを探しつづけていた。とてもとても大切なもの。そのために歩いているのだと、いつでも確信することができた。

きみは森のそばの小さな村で暮らしていた。大切なものが、道なき道を歩み、自分のもとへたどりつく日を、ひたすら待っていた。ずっとずっと待ちつづけていた。そのために自分があることを、片時も忘れることはなかった。

探す日々も、待つ日々も、夜空を見あげれば癒された。

ぼくらは宇宙とつながっていることができた。

すべてを信じることができた。

だから、ぼくらは出会えた。

森の小道からきみがあらわれたとき、ぼくは自分が探しつづけていたものの正体を知った。きみは、待ちつづけていたものの正体を知った。

ぼくはなにひとつもたない旅人だったけれど、なにも必要なかった。

肉体さえあればよかった。

ささやき、ふれあい、見つめあう。

きみと交わすすべてのことから愛を学んだ。

ぼくらはなんてあたたかかったのだろう。

ぼくらはなんていとおしい存在だったのだろう。

光であったころには知りえなかった、めくるめく感情。

やわらかな風や、かぐわしい花の香り、鳥のさえずり。きみを守りはぐくんできたすべての存在、目に見えるものにも見えないものにも感謝した。

きみを愛することで、自分自身を愛し、また、すべてを愛した。

まさしく、世界は愛でできていた。

ぼくらは愛しあった。

死が、ふたりを別つまで。

死。

無限からきたぼくらはじめて体験した、喪失。

愛するものがきえてしまう恐怖。

ぼくらが光であることを忘れ去るのに充分すぎる衝撃だった。

あるときぼくは、ある土地の領主だった。

あたらしいもの、めずらしいものをあつめるのが趣味だった。欲しいものはなんでも手にいれた。そうでないと気がすまなかった。たくさんのものにかこまれていた。

しかし、こころは満たされていなかった。

あつめてもあつめても、なにかが足りないと、自分のなかで叫ぶ声があった。

星空を見あげると、胸がせつなくうずいた。

決定的ななにかが足りない。とてもとても大切なもの。

言いようのない孤独感にさいなまれ、鬱々とふさぎこむようになった。

おかかえの占い師が言った。

「タマシイの伴侶があなたを満たしてくれるでしょう」

ぼくは領地中の娘をあつめた。

着飾った娘たちのなかでひとり、かがやいて見える清らかな少女がいた。きみだった。

ぼくと目をあわせ、はにかんだ笑みをうかべた。

ぼくは自分に欠けていたものの正体を知った。

きみさえそばにいてくれれば、なにもいらないと思った。

きみもおなじだと疑わなかった。

すぐにきみを屋敷へむかえいれた。高価な宝石、豪華な衣装、贅沢な食事。きみにしてあげられることなら、なんでもしてあげたかった。

それがぼくの愛のあかしだった。

けれど、きみは瞳をふせ、かなしそうにうつむくばかり。

ぼくは困り果てた。

どうすれば愛が伝わるのだろう。

どうすればきみも愛してくれるのだろう。

なにが欲しいのか、なにがしたいのか、ぼくはたずねた。

なにもいらないと、きみは言った。親兄弟に会いたいと、乞うた。

ひどく裏切られた気分だった。こんなにも愛しているのに伝わらないもどかしさに、からだじゅうがふるえた。

青ざめたぼくに、きみは言った。

「あなたを嫌っているのではありません。わたしを産み育ててくれた両親と、ともに支えあってきた兄弟を思う気持ちを、どうかみとめてください」

理解できるはずがなかった。

ぼくはきみ以外欲しくないというのに。

そんなことは、あつてはならないことだった。手にはいらぬものがあるなんて信じられなかった。ぼくはどうしても、きみをぼくのものにしたかった。

そうでなければ生きている意味がないと、本気で思っていた。

微笑みかけてもくれなくなったきみに、怒りさえおぼえた。

それでもぼくはきみを愛していた。だから、きみがぼく以外の存在を求めることの間違いを正そうと努めた。

きみのために特別な塔を建て、ぼくとしか会えないようにした。

まいにち贈り物をして、まいにち愛をささやいた。

ひっそりと、きみが息をひきとるその日まで。

あるときぼくは騎士だった。

美しい姫に忠誠を誓っていた。きみだった。

きみはぼくを信じていなかった。ぼくをためしてばかりいた。

凶暴な獣の牙に、竜のうろこ。きりたった山の頂上に咲く花や、海底に沈む幻の宝石。

きみの瞳に映ることができるのなら、どんな困難でも苦ではなかった。肉体が傷つくことなど恐れず、ぼくはなんだってきみに捧げた。

だけど、きみがよろこぶのはほんの一瞬だけ。そんな危険をおかさせた自分に愛想を尽かすのではないかと怯え、顔をこわばらせた。

とりつころうようにほどこされる、たくさんの金貨。

そんなものが欲しくてしたのではない、ただ、あなたを愛しているのだと告げても、きみは信じてくれなかった。

きみは立場にとらわれていた。

位の高いきみにぼくが忠誠を誓うのは当然だと思っていた。それを確認するかのようになり、無理難題ばかり命じた。ぼくがきみに従うことで安堵し、同時に落胆した。ぼくがきみにこたえるのは立場あつてのものだと思いこんで。

きみは自らの美しさにとらわれていた。

ぼくがきみに忠誠を誓うのは、きみが美しいからだと思っていた。間違いではない。ぼくはきみが放つかがやきにどうしてもひかれてしまうのだから。

鏡に映る姿だけではなく、瞳をかがやかす内なる光に、ぼくはひかれていた。

きっと、宇宙を旅していたころのかがやきを感じとっていたんだらう。

きみもぼくの目にそれを見ていたんじゃないだらうか。だからこそぼくにこだわった。

ぼくを失わないように、きみは権力を誇示し、美貌をたもつために神経をすり減らせた。

疲れ果てたきみは、ある噂を耳にする。

「若く健康なヒトの心臓をくらえば、永遠の命と、衰えることのない美貌をさずかることができるだらう」

きみはぼくにそれを命じた。ぼくがそれを調達できれば、ともに食すことをゆるそうとまで言った。

命令ではなく、哀願だった。

ぼくと永遠に生きたいという、きみなりの愛の言葉だった。

ぼくは笑い、うなずいた。

そして、心臓をさしだした。

自らの胸をきりひらいて。

愛を、自分自身を表現することは、なんてむずかしいんだろう。  
この美しい慈愛の星に降立ってから、まるで深い森に迷い込んだようだ。  
どこにいるのか、どこへ向かっているのかわからない。  
夜空を見あげても、自分のちいささを思い知らされるようですこしも癒されない。  
なにを信じればいいのか。  
大切なものは手にいれたはしからこぼれ落ちていってしまう。  
うつろいやすい世界。  
愛からどんどん遠ざかっているようだよね。  
だけど、どうか悲しまないで、もうすこしだけ聞いてほしい。  
すべては完全だということを、本当は知っているだろう？  
あるときぼくは、ある国の、はいてすてるほどの民のひとりだった。  
働いても働いても、なにも手元には残らなかった。王にすべてを奪われた。  
うまれたときから、一生はすでに決められていた。  
民は王のために身をけずり、死ぬまで働きつづける。若くして他界した両親のように。王はそれをただうえから眺め、いや、気にもかけずに富を享受するだけでいい。  
役割分担。手のとどかないところで最初から決まっていること。望んだとおりにうまれることができるなら、みんな王になっている。  
夜空に散らばる星々さえも、定められた軌道をすすむしかないのだ。  
人間ごときに変えられるものではない。  
王とて、望んでそこへうまれたのではないだろう。  
そう理解して運命をうけいれたとしても、気が晴れるわけがなかった。  
なぜ、こんな辛い思いばかりしなければいけないのか。  
目に見えるものすべてを罵り、憎んだ。恨み、つらみ、皮肉、あざけり。くらい感情ばかりがわきあがった。  
そんなものばかりうみだす己の意識さえ嫌悪した。  
生きていれば生きていくほどけがれていくようだった。  
まさしく、世界は悪でできていた。  
世界相手に立ち向かうにはあまりにも無力だ。  
若くして悟ってしまったぼくに、残された道はなかった。  
こんな世界には生きていたくない。自分ひとり消えたからってなにも変わりはない。  
すべてに絶望し、いのちをたとうとしたとき、風がふいた。  
  
声が、聞こえた。

感じることをやめないで。  
どんなにひどく思えても、感じることから逃げたりしないで。  
それは、あなたが望んだこと。  
あなただけの宝物。  
わたしたちの宝物。  
意味がわからなかった。  
こんなひどい生活を、自らが望んだというのか。  
無責任にしか聞こえない風の声に、戸惑いと、怒りを感じた。  
それでも、その声にはあらがえないなにかがあった。  
自分でも目をそらしたくなるほど黒々とした思いばかりをかかえるぼくを、すこしも責めはしなかった。  
ぼく自身よりも、ぼくを知っているようだった。  
目に見えない、やわらかななにかがぼくをつつみこんだ。  
なつかしかった。  
ゆるされた気がした。  
ぼくは、感じることから逃げるのをやめた。  
それが恨みであろうと憎しみであろうと、ぼく自身として認めた。  
その感情とともに生きることを決めた。  
不思議なことに、ぼくを蝕んでいくくらい感情は、やがて強い力へとかわっていった。  
ぼくは、おなじように苦しみにあえいでいる人々に呼びかけた。  
「憎しみを押し殺すことなどない。それこそが我らに与えられた力だ。運命に打ち勝つために、いまこそ立ち上がろう」  
人々を扇動するのはたやすかった。  
辛さのあまり考えることをやめていた人々は、すぎるなにかを求めている。  
かつてぼくらが、占いや噂に未来をあずけたように。  
ぼくらは王を討ち取った。  
最初に声をあげたぼくは英雄としてたたえられた。  
みんなぼくに従いたがった。  
ぼくはあたらしい王となった。  
自国の民を苦しめるかわりに、他国に攻め入ることを提案した。  
みんな歓喜してそれに賛同した。  
自分で考えるより、なにかにゆだねる道を選んだ。  
戦いは祝福だった。  
自らの力で世界を手にいれていく喜びに、みんな酔いしれた。  
つぎることのない欲望。  
手にいれれば手に入れるほど、飢餓感は増していく。  
侵略はつづいた。  
境界線があるかぎり。  
さだめられた運命を恨み呪うのと、よい生活を与えてくれるのを信じて誰かを崇拝するのと、なにかち



がいはあるのだろうか。

どちらがより生きているといえるだろう。

人々の生活はおおきくかわったように見えたけれど、本質的なものはまったくかわっていないように思えた。

王になったぼくでさえ、自分を生きている感覚はうすかった。

どれだけ崇められようとも、どれだけ堂々と振舞ってそれにこたえていようとも、中身は無力感にさいなまれた少年のままだった。それを自覚していたから、周囲の人々の自分に接する態度と、それにとまなわない己の内面との差に、違和感をおぼえた。

誰かひとりでも、本当の自分を見てくれているのだろうか。

帰るべき道を見つけられずに途方にくれている迷子のようなぼくを。

人々の目に、いつしか苦痛をおぼえるようになった。見られれば見られるほど、自分が自分でなくなっていく気がした。自分が消えていくようだった。

自分自身を生きることができていない感覚は、真綿で首を絞めるようにゆるやかにぼくを追いつめていく。

なにかに動かされている気がしてならなかった。自分ではとうてい太刀打ちのできない、圧倒的な力によって。

どうしてぼくはここにいるんだろう。

星はただ天空をめぐるばかり。

この虚無感はいつになったら消えるのだろう。

全世界を支配できたなら、すべてから解放されるのだろうか？

ある夜、ぼくはバルコニーで夜風にふかれていた。

外からの敵に侵入されないように崖のうえにせりだしたバルコニーは、城のなかでも安全な場所だった。

不意に、なつかしい気配を感じた。

見えないものに、ふわりとからだをつつまれた。

「誰だ！」

声をあげ、剣を抜いた。

まといつくやわらかな気配が消えた。

夜の空気がさざめくように揺れた。笑っているのだと、なぜかはっきりとわかった。

「姿を見せろ！」

ぼくの命令に、きらきらときらめく光の粒が空を舞った。

『わたしを忘れてしまったの？』

声とともに、光の粒がひとつところにあつまった。バルコニーの手すりのうえで、あわくかがやく球体になる。

新緑の葉に陽光がさしたような、若々しく、それでいて平穏な緑色の光。

ぼくは剣先をその光にさだめ、目を眇めた。

胸にじんわりとあたたかいものがひろがった。なぜだか無性に泣きたくなった。

その思いをふりはらい、おまえは誰だと冷静に問うた。

『すべてよ。あなたのすべて。あなたがかかわったすべて。あなたがわたしにとってそうであるように』

うたうように光はこたえ、くるくると回転しながら姿を変えた。

ぼくの両親の働きづめでやつれ果てていた最期の顔。

ぼくの呼びかけにあつまった人々の期待に満ちた顔。

ぼくが討ち取った王の愕然と目を見開いた顔。

ぼくが侵略した他国の人々の恐怖と苦痛に歪んだ顔。

つぎつぎと浮かんでは消えていくたくさんの目が、ぼくを見つめた。

やめろと叫び、剣をふりおろした。

ぼくを映していた光は真っ二つにわれた後、ふわりと球体にもどった。

『ずっとあなたを見てきたわ。ずっと、ずっとね』

甘い声に、たくさんの目が脳裏をよぎり、身震いした。

「どうしてこんなことを」

『あなたが望んだからよ』

いつかとおなじ言葉だった。

すべてに絶望し、みずからいのちを投げ出そうとしたときに聞こえた声。

ぼくをここまで導いたともいえる、風の声。

あれからぼくは幸せになれただろうか。憎しみのままに、王を倒せば、世界を壊せば、運命から自由になれると信じてきたが、残ったのは虚しさだけではなかったか。

光が静にかがやいた。悲しみの気配がただよった。

ぼくはうめいた。

胸が締めつけられるように痛んだ。なにかを忘れていたような気がした。とてもとても大切なもの。

『思い出せなくてもいいの。それはわたしたちが決めたルールだもの』

光はなぐさめるように言った。

したしげな声にこころがふるえた。

これまできずきあげてきた自分が打ち砕かれてしまいそうな予感がした。王として、支配者として、落ち着き払った態度はしみついているはずなのに。

『わたしが怖い？』

光はきらきらと瞬いた。

やさしげな声をした得体の知れない緑の光に、ぼくはみがまえた。

『怖がらないで。わたしはあなたを愛しているの。あなたの願いならすべて叶える覚悟があるくらいに。あなたもそうであるように。ねえ、あなたの願いを聞かせて』

そう言って、光はぼくのまわりを蝶のように飛びまわった。

ぼくは夢をみているような思いでそれを見つめ、つぶやいた。

「自由になりたい」

『自由に？』

「ああ。なにかに支配されている気がしてならないんだ。自由に自分自身を生きてみたい」

『あなたは自由よ。それを忘れてしまっているだけ。知るために忘れているのよ』

光はやさしくぼくをてらした。

「そんなことあるものか。知るために忘れるなんて馬鹿げている」

いつかのように、ぼくは戸惑い、怒った。

「大切なものを森へ放り投げ、目隠しをして探しに行くようなものじゃないか。そんなたわごとを信じると言うのか」

荒げたはずの声は、途中から自信なげに掠れた。

ぼくはまるですがるように光を見つめた。

『……じゃあ、もうおわりにする？ 一緒に帰る？』

その誘いは、からだの奥深くに甘く響いた。

光に手を伸ばしたとしたら、ふれたところからとけてしまうかもしれない。

その光景を、やけに鮮明に思い浮かべることができた。

光ととけあうのは簡単だということを、ずっとまえから知っていたように思えた。

この光ととけあえば、あの場所に還れる。

一瞬、頭がぼうっとなった。

あらがいがたい魅力にひきよせられそうになる。

だけど、ぼくは踏みとどまった。

こんなにもうんざりしている自分自身を、なぜか見切ることができなかった。

最期までやり遂げなければという思いがわきあがってきた。

うつくしい光から発せられるなつかしい声よりも、ちっぽけな自分を選んだ。

まだ、自分を知らない。

自分を知りたい。

ぼくの覚悟を瞬時に感じとった光は、きらきらと光の粉をまきちらすように揺れた。

『それでいいのよ。わたしと一緒に見つけましょう』

光は満足そうにきらめいて、気むずかしい顔をした美しい姫の姿になった。

思わずひざまずいたぼくに首をふり、立ち上がらせて、嬉しそうに微笑みかける。そして、かなしげにう

つむいた清らかな娘の姿になった。途端に胸を刺す悲しみにおそわれた。しずかに顔をあげた娘は、立ち尽くしたぼくにふわりと微笑んで、質素な服に身をつつんだ村の少女の姿になった。

あわく発光し、手すりのうえでかるやかに舞う。

やわらかな風と、かぐわしい花の香り、鳥のさえずりを感じた。

さまざまな想いがからだじゅうを駆け抜けていった。

少女ははじけるような満面の笑みを浮かべ、手すりから跳躍した。

『また会いましょう』

あまりのまぶしさに閉じたまぶたの裏に、広大な宇宙が見えた。

自分がなにものなのか、なにによって動かされているのかわからぬまま、時は過ぎた。

こたえを求めて侵略をつづけたが、なにもつかめはしなかった。

あれ以来、光があらわれることもなかった。

すべてを侵略しつくしたころ、ぼくはもう年老いていた。

人々はもはや戦う必要はなく、よく働き、よく遊んだ。歌や踊り、絵画や彫刻、生活を彩る文化を楽しむようになった。城を出入りするのも、兵より着飾った芸人たちのほうがおおいと思われるほど、のどかな日々。

境界線をなくした大地には平和があった。一見は。

どれだけ力を得ようとも、時のながれはとめられず、ぼくは自分に残された時間が短いことを察していた。

全世界を支配しても、自由を得られなかったことに、失望していた。

自由を求め、あがくだけあがいたけれど、やはり無力なままだった。

ぼくを支配していたものは、この、いのちそのものではあるまいか。勝手に生まれ、時が来れば消えてゆく、本人の意志などおかまいなしのいのち。

このいのちはいったいどこから来たんだろう。

なんのために生まれ、なんのために死んでいくのだろう。

侵略によってたくさんの血を流し、いのちを奪っておきながら、いのちについてなにも知らないのだった。奪ったいのちと自分のいのち。なにかちがいはあるのだろうか。

誰もが支配からは逃れられないのだろうか。

バルコニーに立ち星空を見あげるたびに、あの夜を思い出した。

思い出すために、幾度もバルコニーに立った。

緑色の光が見せた、たくさんの人々。

ぼくにかかわるすべてだったと、光は言った。

ぼくは最初から自由であると、光は言った。

その意味がわからぬまま死んでいくのかと思うと虚しくなった。

そもそも生きることに意味などなく、あの光と言葉は、意味を求めた自分が生み出した幻だったのではないかと思えた。

自由などない。

結局は、ひとりで生まれ、ひとりで死んでいくだけだ。

ただ、それだけのこと。

ながい時間をかけて見つけたこたえがこれかと思うと、おかしくなった。

満天の星のした、思わず笑みをこぼしていると、背後に殺気を感じた。

「誰だ？」

ぴんとはりつめた気配に臆することなく、ゆっくりとふりむく。

華やかな踊り子の衣装をまとった娘がいた。手に短剣をにぎっている。

「あなたが侵略によって得た民のひとりだ。わたしの親兄弟は争いで死んだ。あなたに殺されたも同然だ。

敵を討ちにきた」

紅のうす絹をひるがえし、少女はぼくのふところへと飛び込んできた。

このときの衝撃をなんて伝えたらいいだろう。

娘の燃えるような怒りが、手に取るようにわかった。からだじゅうで、憎しみと怒りを経験しているのだ。かつてのぼくのよう。

ぼくは、娘の憎しみに燃えた瞳に、深い深い愛情を感じた。

愛なんて、この生でかけらも感じたことがなかったというのに。

「なぜ逃げない」

のどもとに短剣を突きつけ、少女はひくい声で問うた。

「おまえの気持ちがわかるからだ。なんど殺しても殺し足りないことだろう」

こたえながら、おおきな運命に流されているのを感じた。自分も少女も運命の渦にまきこまれている。やはり、人間に自由などなかったのだ。

運命はめぐり、くりかえす。

憎しみや悲しみを糧にして。

「自分がしたことがかえてきただけだ。逃げはしない」

自らの意思で彼女の刃を受けることによって、最期の一瞬だけでも運命から自分を勝ち取れるような気がした。

このときを待っていたのかもしれないと思いながら、安らかな気分で目を閉じた。

けれど、少女はきっとぼくとおなじ道をゆくだろう。殺してもなにもかわらないことを知るだろう。運命に、自分の無力さを思い知らされるだろう。

このさき少女がたどるであろう運命を思うと胸が痛んだ。

「王よ、あなたは自分のいのちが惜しくないのだな。だから、簡単に奪うことができたのだ」

少女の吐息がふるえたのを感じた。

目をあけると、思いがけず澄んだ目とぶつかって、息をのんだ。

「わたしはあなたを殺さない。もう、誰の血が流れるのも嫌なのだ。それは、自分が大事だからだ。失われたいのちが大事だからだ。あなたにもおなじいのちがあると、信じたいからだ」

凜とした声で告げ、少女はまっすぐにぼくを見つめた。

まるでかけろうのように、少女の姿が揺らめいた。

村の少女、清らかな娘、美しい姫。過去に出会ったすべての人々がかさなった。

「あなたへの憎しみが消えたわけではない。だが、わたしが赦すところを知るために、あなたは必要なかもしれない。そう信じたい」

その瞳に、緑の光を見た。

幾度も思い返したあの夜がよみがえった。

驚きのなかで、なにもかもがするするとつながっていった。

きみは、ぼくが望む願いならすべて叶える覚悟があるくらいに愛していると言った。

ぼくが望む、ぼくが知りたがる、すべてのことを経験するのを叶えるために、ありとあらゆるところに存在するのだと。

そしてぼくは、きみが望む、きみが知りたがる、すべてのことを経験するのを叶えるために存在する。

互いに忘れていようとも。

互いをとおし、自分自身をも見つめている。

ぼくらはつながっている。

すべての記憶を、経験を、共有している。

共にひとつの夢をみている。

ひとりの視点では見渡せないほどの壮大な夢を。

こうして知っていくのだろう。

すこしずつ、すこしずつ。

ぼくは、運命などなかったことを知った。

目がくらむほどの大いなる愛で、自由を与えられていたことを知った。

これがぼくらの旅の一部。  
きみとともに経験してきたこと。  
忘れていてもかまわない。  
そうでなければ意味がないからね。  
それでも、もし、きみがとても苦しいのだとしたら、すこしのあいだ目を閉じてみてほしい。  
きみの胸にある、あわい緑の光を思い出して。  
思い出せなくても、イメージしてくれるだけで充分さ。  
若葉を透かした太陽の光。  
その光はゆっくりと、きみのからだをのぼっていく。背骨にそって、ゆっくり、ゆっくりと。  
頭のとっぺんまできたら、そのままそっと出してみよう。  
肉体をこえて、屋根をこえて、どんどんうえへのぼっていこう。  
こわくなったらやめればいい。胸に意識おけば、すぐに戻れるから心配しないで。  
むずかしければ、深い息を吸ってごらん。はきだすたびに、すこしずつ、かるくなって舞いあがっていく。  
雲をこえて、空をこえて、きらめく星々の世界へ。  
となりにいるぼくを感じるかい？  
息をあわせて、もっとたかくまで飛んでいこう。  
ここからは、いまきみがいる場所、地球が見えるね。  
青くかがやく、とても美しい星。  
なつかしく感じるのは気のせいなんかじゃない。  
ぼくらはここからはじめたんだから。  
その旅の途中なんだ。  
宇宙にはたくさんのいのちがある。  
意識がある。  
ぼくらのなかのひとつ。  
純粹なる光。  
かつてぼくらは、すべて知っていて、なにひとつ知らなかった。  
完全であり、それゆえに不完全だった。  
愛とはなになのか、愛とはどうするのか、知りたかった。  
愛を、自分自身を表現するために、ぼくらはうまれた。  
地球はそれを叶えてくれている。  
いまならわかるね。  
地球がこんなに美しいのは、よろこびも悲しみも憎しみも、なにもかもをすべてうけいれつつんでくれる深い愛が放たれているからなんだ。

いま、きみはなにを知るために、ここにいるんだろう。  
なにを感じているんだろう。  
ぼくらは自由のなかで、いろんな経験をした。



翻弄されるばかりだったけど、無駄なことなんてひとつもなかった。

痛みさえ大切な宝物。

だからこそ、えがける夢がある。

はばたける未来がある。

だから、きみはここにいる。

だから、ぼくはここにいる。

ぼくらはなんども出会うだろう。

愛とはなにかを知りえるまで。

この美しい地球のどこかで。

この広大な宇宙のどこかで。

いつか、笑顔で再会しよう。

それがぼくらの、旅の約束。

旅の約束

<http://p.booklog.jp/book/60997>

著者：青い月

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/anemone-07/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/60997>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/60997>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ